

歴史教育における記憶の取り扱いについて
－ヴァンドーム広場の記念柱の教材化を事例に－

高橋 健 司

はじめに－記憶の表象と歴史教育－

1. 「記憶のかたち」の教材化の意義
 2. 「記憶のかたち」の教材化の視点－広島「平和塔」から考える－
 3. ヴァンドーム広場の記念柱の変遷
－ナポレオンの記憶の表象をめぐって－
 4. ヴァンドーム広場の記念柱の教材化
 - (1) 記念柱の建立（第一帝政期）
 - (2) ナポレオン像の撤去（復古王政期）
 - (3) ナポレオン像の復活（七月王政期）
 - (4) ナポレオン像の交代（第二帝政期）
 - (5) 記念柱の破壊（パリ・コミューン期）
 - (6) 記念柱の再建（第三共和政期）
 5. 単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」の開発
 - (1) 第1次：ナポレオンとフランス近代美術
 - (2) 第2次：ヴァンドーム広場の記念柱とフランス社会の変動
 - (3) 第3次：「記憶のかたち」と歴史表象
- おわりに－「モノが語る」と「モノを語る」－

平成16年度宮田研究奨励金の交付を受けた。

はじめに－記憶の表象と歴史教育－

近年、歴史教育、特に世界史教育の分野において、歴史的記憶の表象に大きな関心が寄せられている。それはセンター試験の世界史で、繰り返し記憶をめぐる問題が出題されていることから見ても分かる。

例えば、2002年実施の世界史Bの問題では、「祭りや儀式が政治的な意味を持つことがある。(中略)政治体制が目まぐるしく変化した19世紀にも、ナポレオン1世の生誕を記念した第二帝政期の祭典、フランス革命の諸事件を記念した第三共和政期の祭典などが催され、しばしば過去の偉大な人物や出来事にかかわる記憶が喚起された。同じ過去を共有することで、人々の間に一体感や政治体制への共感が生まれると期待されていたのである」と説明され、祭典によって喚起される歴史的な記憶の持つ政治性に注目させようとする意図が読み取れる⁽¹⁾。

また、2004年実施の世界史A・Bの共通問題では、「近代ナショナリズムは、18世紀末から19世紀にかけてヨーロッパと南北アメリカ大陸に現れて以降、多くの場合、ネーション・ステート(国民国家)の建設と強化を志向してきた。その際、国民国家を人々に意識させるために、シンボルや儀礼が盛んに用いられた。そうしたシンボルや儀礼の例として、国民国家を象徴する旗や歌、彫像など、また、ネーションの歴史のなかで重要とみなされた、建国や革命、戦争のような事件を記念する記念碑や祭典がある」と説明され、記念碑の具体例として、ナポレオンに対する勝利を記念して1913年にドイツで建設されたライプツィヒの戦い(諸国民戦争)記念碑と、フランスで1878年に設置された「共和国」像が取り上げられており、国民国家のシンボルとしての記念碑すなわち「記憶のかたち」の役割に注目させようとする姿勢が窺える⁽²⁾。

そして、2005年実施の世界史A・Bの共通問題でも、「歴史上の出来事を記念した建造物や祝祭・儀礼は、民衆の心のよりどころとされるとともに、政治的な意味を持つこともあった。(中略) 1890年代初め、アメリカ合衆国のシカゴで万国博覧会が開催された。『白い都市(ホワイト＝シティ)』と命名された中心会場の建物群に、来場者は驚嘆した。当時のシカゴでは、新しい世代の建築家たちが、19世紀後半に実用化が進んだ鋼鉄材による建築を発展させ、近代的な高層ビルを建設して注目を集めていたのに対し、『白い都市』は、古代ローマなどの古い時代の建築様式を模していたからである。この『白い都市』の様式は大人気を博した。その理由の一つは、海外へと勢力を拡大しつつあったアメリカ合衆国のイメージが、ローマ帝国の栄光と重ねられたためと考えられる。また、心のよりどころとしての過去がヨーロッパに求められたという面もあった。(中略) 1980年代のフランスでは、諸文明の継承者であるという自負を示すかのように、ルーヴル美術館の中庭のガラス製ピラミッドや、パリ近郊のデファンス地区の『ラ＝グラン＝アルシェ』など、古代文明の建造物を現代風にアレンジした建造物が造られた。『ラ＝グラン＝アルシェ』は、人類を乗せて未来へ旅立つ『大きな箱舟』を意味するとともに、現代の凱旋門として、「古代ローマ文明とつながるフランスの歴史の流れをも人々に想起させる」と説明され、「歴史上の出来事を記念した建造物」の意味を読み解くことで改めて「記憶のかたち」の政治性に対する関心を高めようとしている⁽³⁾。

このように、歴史学において歴史表象が大きな議論を呼んでいることを反映して、歴史教育の場でも「歴史的記憶は如何に表象されるのか」が問われ始めているのである。

そこで本稿では、記念碑に代表される「記憶のかたち」を教材化することの意義と視点を考察し、事例として高等学校世界史において、パリのヴ

ァンドーム広場に立つ記念柱を教材化し、それを用いた授業を開発することを目標としたい。

1. 「記憶のかたち」の教材化の意義

既にセンター試験では、歴史的記憶の表象に焦点が当てられている一方で、授業レベルにおいては、未だ十分に「記憶のかたち」が教材として注目されているとは言えない。

こうした状況に対し、文部科学省・教科調査官の原田智仁は、歴史に対する構築主義的な見方が主流になり、次々に新しい物語＝歴史が生産され、多様なメディアを介してそれが市場に出回っている現状を踏まえ、世界史教育の課題として「歴史リテラシー」すなわち「歴史を読み解く力」「歴史とかかわる力」の育成を掲げて、その具体的方法の一つに、世界史の授業における「銅像・記念碑の読み解き」を挙げる⁽⁴⁾。

原田によれば、世界史の教科書や図説資料集に散見する銅像や記念碑の写真は、「本文に登場する人物や出来事に一定のリアリティをもたらすための手段と捉えられており、それ自体を問うことはほとんどない」とする一方で、先述の2004年実施のセンター試験問題に触れて、「今後は歴史教育の分野でも歴史表象やメタヒストリーにも関心が向けられることが予想される」とし、事例として米国のリンカン記念堂を教材として用いる世界史授業を構想する。

そして、その4通りの方法として、①ワシントンD.C.に建設されたリンカン記念堂は、リンカンが暗殺された1965年から半世紀以上遅れた1922年に完成したものであり、授業で「なぜリンカンの顕彰が遅れたのか」を問い、南北戦争が「国家に与えられた試練であり結果的に国家の結びつき

を強化した」とする「戦争の神話化」が生じたことを浮き彫りにして、南北戦争の評価の変容を考えさせる、②1960年代の公民権運動を扱う中で、「なぜこの年（1963年）にワシントン大行進が行われたのか、なぜキング牧師の演説が記念堂でなされたのか」を問い、リンカンの奴隷解放宣言から100年を経ながら、なお黒人差別が根強く残っていた事実やその背景を追求させる、③国民国家の課題を扱う中で、レーニン像の撤去に関連させて、「そもそも近代国家はなぜ多くの銅像を建設するのか」を問い、その意味を探求させる、④米国の主な都市を紹介する中で、「首都のワシントン記念塔、議事堂、ホワイトハウス、アーリントン国立墓地等の分布が何を示唆するか」を問い、米国民のアイデンティティを考えさせる、が挙げられている。

また、長崎県立川棚高等学校の新木武志も、「わたしたちが『歴史』に接する時、わたしたちは否応なしに『表象をめぐる闘争』に巻き込まれる。特に現代の私たちを取り巻く、映画やマンガなどによる歴史表象は、感情に訴えかけるものであるだけに、大きな影響力をもってわたしたちに迫ってくる。そのなかで生徒が、表象に込められたメッセージを読み解く力をつけることは極めて重要である」との問題意識から、「歴史教育における表象分析の意義と課題」と題する論考の中で、イギリスの首都ロンドンにあるトラファルガー広場の空間分析を行い、教材化の方向を示している⁽⁵⁾。

新木によれば、19世紀後半に建設されたトラファルガー広場は、「トラファルガーの海戦やネルソンなどを記念したモニュメントが設置され、イギリスにおける集合的記憶の創出の典型的な舞台」であり、そこに込められた「イギリスの植民地支配を正当化」し「群集を帝国の国民として意識させる」といった政治的メッセージを授業で明らかにすることを構想している。そしてトラファルガー広場は、「ネルソンらの軍人、トラファルガー

の海戦などをイメージさせる教材」としてではなく「それを製作し、それらをディスプレイした社会について考えるための教材」として用いられるべきであり、「どのような歴史表象も『現在』をめぐって構成されたもの」ゆえに、歴史教育では「特定の歴史表象を生徒に伝えるのではなく、歴史表象そのものを取り上げ、生徒とともに分析することが必要」と主張する。

このように、両者とも歴史表象に対する問題意識から、過去を記念するモニュメントや記念碑の教材化に注目しており、それらを世界史の教材として用いることで、生徒の「歴史とかかわる力」や「表象に込められたメッセージを読み解く力」を育成しようとする姿勢が窺える。それゆえ、「記憶のかたち」を教材化することは、歴史表象の現在性・構築性を考察する手立てとなり、歴史リテラシーを身につける上で、大きな意義があると考ええる。

2. 「記憶のかたち」の教材化の視点－広島「平和塔」から考える－

ここに広島市南区皆実町で撮影した塔の写真がある。頂上には羽を広げた大きな鳥が安置され、台座の正面には「平和塔」と刻まれ(資料1参照)、背後には「昭和二十二年八月六日」と刻まれている(資料2参照)。日付や「平和」という言葉から判断すると、この塔が原爆を記念したものであることは明確だが、単にその「平和」のメッセージを読み取るだけでよいのであろうか。

美術史研究の木下直之は、『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶』を著し、この中で「平和塔」に注目して、それがかつては「凱旋碑」であったことを明らかにしながら、記念碑の変容の意味について考察を行っている⁽⁶⁾。木下によれば、この塔は日清戦争後の1896年に建設さ



〔資料 1〕



〔資料 2〕

れた「凱旋碑」であり、戦時中、広島城内には大本営が置かれ、日本軍は宇品港から乗船して大陸へと渡り、再び宇品へと凱旋したことを記念して、宇品から広島市内へと向かう御幸通り・凱旋通りと呼ばれた大通りの傍らに、頂上に神武天皇の東征伝説に因んだ「金鷄」（ただし、地元では鷹の塔と通称されている）を載せた「凱旋碑」を建設した。

ところが、台座の背面の「凱旋碑」の由来が書かれていた部分は見事に削ぎ落とされ、日清戦争における勝利を記念した記憶が隠蔽されている。すなわち、「凱旋碑」は「昭和二十二年八月六日」を境に、被爆の記念碑としての「平和塔」に生まれ変わり、この塔はその変容を物語っていることを、見落としてはならないと考える。

それはまさしく、文化史を研究する小関隆が「コメモレイションの文化史のために」と題する論考の中で、「記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為」であって、「個人や集団のアイデンティティが固定されたものではなく、不断に変容を遂げることに対応して、記憶も絶え間なく作り直されていく。また、『記憶に値する』と認定された何かが呼び起こされる一方では、そうでないものが排除され隠蔽される。この意味で、忘却は記憶の構成部分である」と唱えるように⁽⁷⁾、記念碑が想起させようとするものにのみ目を向けるのではなく、それによって、どのような記憶が忘却されてしまうのかという点に、注意を払う必要がある。

歴史教育の立場からも、兵庫県立香寺高等学校の安達一紀が、記憶とは再生するのではなく想起する、極めて「能動的な行為」であって、何を想起し何を想起しないか、すなわち「何かを記憶するということは、何かを忘却するということと同じ」であって、記憶は「常に鋳直されていく（再構成されていく）」性格をもつ点に注目しており⁽⁸⁾、「記憶のかたち」を

教材化するには、「想起される記憶」と「忘却される記憶」の双方の視点が不可欠である。

また同時に、記念碑の変容から、それをもたらした社会的背景の変化を読み取ることも、重要ではないだろうか。これに関して、近年再評価が進むフランスの社会学者、モーリス・アルヴァックスに注目したい。アルヴァックスは1877年、フランスのアルザス地方に生まれ、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期に「集合的記憶」という概念を唱えて、『記憶の社会的枠組み』(1925年)、『集合的記憶』(1950年：死後に遺稿をまとめて刊行された)を著したが、ナチス・ドイツ占領下のパリでゲシュタポによって逮捕され、1945年、ブッヘンヴァルト強制収容所において死亡した。

アルヴァックスはこの『集合的記憶』の中で、「われわれは、隠喩によってにせよ、集団の記憶について語ることに慣れていない。こうした能力は、それが個人の肉体や頭脳と結びつく限りにおいてしか、存在し持続することができないように見える。しかしながら、思い出が組織化される仕方には二通りあり、時には思い出は一定の人間を中心にして集まり、その人間が自分の観点から思い出をながめることもあれば、時には思い出が大規模ないし小規模の社会の内部に分配され、その社会の部分的イメージであることもある。したがって、個人的な記憶が存在するし、また集合的記憶というべきものがある」と述べ、個人的記憶を「内的なもの」「自伝的記憶」とする一方で、集合的記憶を「外的なもの」「社会的記憶」「歴史的記憶」と同義であるとし、また後者は「借用した記憶」であって「それを想像することはできるが、それを思い出すことは決してできない」性質のものであるとする⁽⁹⁾。そして集合的記憶の背景には、それを社会に定着させ持続させる「社会的枠組み」が存在すると考えたのである。

このアルヴァックスの集合的記憶について論じた、アメリカの歴史学者

パトリック・H・ハットンは、「現代史学における記憶の位置づけ」の中で、「アルヴァックスの論点は、記憶が持続することができるのは、それを支える社会的文脈のなかである、ということだった。個々人のもつ過去のイメージは束の間のものでしかない。イメージは、共同体全体が定義する概念構造のなかに位置づけられてはじめて『覚えられる』のである。集団の認可という生命維持装置がなければ、個々の記憶はしおれて消えてしまう」とし、「アルヴァックスの理論がとりわけ記念行為の政治性の歴史家にとって魅力的だったのは、集合的記憶は現在の目的に見合うようたえず改定されるというところにこだわったからである。(中略)アルヴァックスは、集合的記憶が持続する力は、それを指示する集団の社会的力に左右されると主張した。回想するときわれわれが取り戻す過去のイメージは、それをもともと知覚したときとは異なり、むしろわれわれの現在の考え方に適合したものとなるのだが、これを作り上げているのはわれわれに働きかける社会的力である。ということで集合的記憶が目立つものなら、それはある特定の集団の社会的役割の反映であり、したがって社会的表象の現象学的研究は、社会史の重要な文化的見通しを与えてくれるのである」と述べている⁽¹⁰⁾。

すなわち、記念碑等の「記憶のかたち」とは、それを作成した社会集団・共同体にとって「必要」とされた集合的記憶・歴史的記憶を可視的に表象したものであり、その「かたち」の変容に注目し教材化すれば、時間の経過と共に、記憶の「社会的枠組み」や「社会的文脈」がどのように移り変わったのかを知り、社会集団のアイデンティティの変遷を学ぶ、社会史の授業が可能と考える。

そこで次章では、事例としてパリのヴァンドーム広場に立つ記念柱の変遷に注目し、その分析を通して教材化・授業構想へと繋げたい。

3. ヴァンドーム広場の記念柱の変遷

－ナポレオンの記憶の表象をめぐって－

木下直之は、先述の広島「平和塔」と対比して、パリのヴァンドーム広場の記念柱の倒壊にも注目している⁽¹¹⁾。それは、パリ・コミューン期の1871年5月16日に起きた出来事であり、頂上にナポレオンのブロンズ像を載せ、柱身はナポレオン戦争期の勝利の場面を浮き彫りにしたレリーフで覆われた記念柱が、パリ・コミューンによって「野蛮の記念碑」「暴力と虚栄の象徴」「軍国主義の肯定」とされ、引き倒された事件である。その背景には、プロイセンに対する戦争の敗北と、第二帝政から世界初の労働者政府へとフランスの政治体制が激変したことがあり、この社会的変動の中で、もはや記念柱を維持してきた「社会的枠組み」が消失したことを表している。

では、この記念柱は、かつてどのようにナポレオンやナポレオン戦争という歴史的記憶を表象していたのだろうか。記念柱の建立まで遡って、その変遷の歴史を振り返って見たい。

そもそも最初にパリ市内のヴァンドーム広場に、記念柱が建設されたのは、第一帝政期の1810年であり、皇帝ナポレオンの41歳の誕生日の8月15日に建立式典が挙行された。この記念柱は1805年のアウステルリッツの戦いで捕獲した1200門の大砲を鋳直して造ったブロンズ製で、記念柱の頂上には、頭に月桂冠をかぶり、左手には「勝利の女神」像、右手には剣を持ち、古代ローマ風の衣装をまとったナポレオン像が設置され（資料3参照）、柱身は、425個のレリーフに刻まれた戦勝シーンで螺旋状に覆われたものであった。

しかし、1814年4月、ナポレオンの退位に伴い、記念柱の頂上にあった

ナポレオン像は撤去されて、復古王政はそれをブルボン王朝のアンリ4世の騎馬像に改鑄し、頂上には代わりに、ブルボン王朝のユリの紋章入りの白旗を据えた。

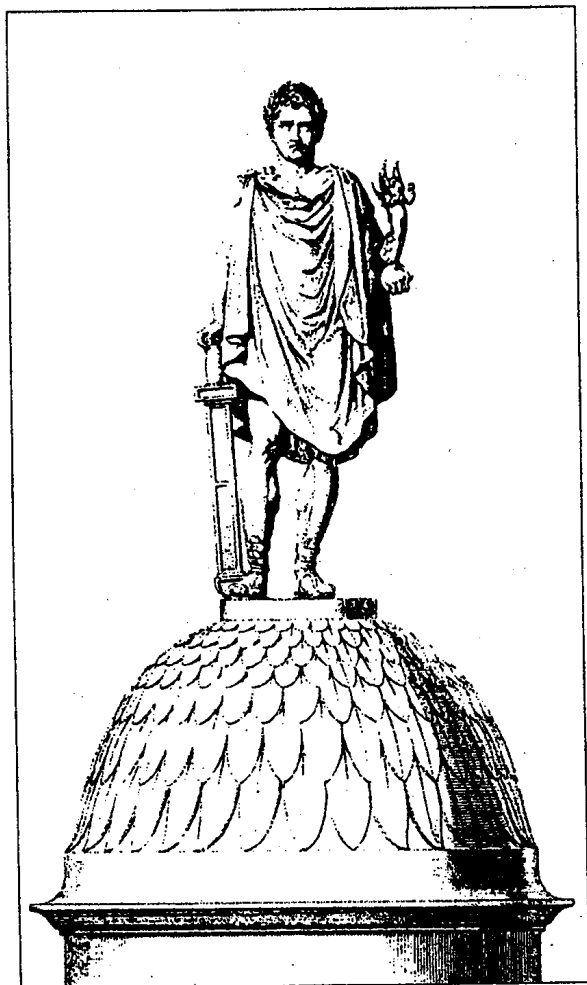
ところが、1830年の七月革命によって誕生した七月王政下で、1833年7月28日の革命3周年記念日に、記念柱の頂上にブロンズのナポレオン像が再建されて復活した。ただし、その姿は元の古代ローマ皇帝を模した初代の像とは異なり、軍服の上にフロックコートを羽織り、右手には望遠鏡を持ち、左手はチョッキの打ち合わせに差し込んだもので、足元には砲丸が置かれ、立っているのが戦場であることを示していた（資料4参照）。これは兵士たちの戦闘で自ら砲弾に身をさらして戦う「小伍長」（兵士によってつけられた愛称）の姿であった。

さらに、1848年の二月革命後、第二共和政下で大統領となったルイ・ナポレオンは、1851年の軍事クーデタでナポレオン3世として即位し、第二帝政を開始すると共に、1863年11月5日、記念柱の頂上の軍服姿のナポレオン像を撤去し、第一帝政期の元のローマ皇帝姿のナポレオン像を模した新たな像に替え、盛大な式典を挙行了た。

そして、1870年、ナポレオン3世はフランス＝プロイセン戦争に敗北し、自らプロイセン軍の捕虜となって第二帝政が崩壊し、誕生したパリ・コミュン下で、1871年5月16日、ヴァンドーム広場の記念柱は、頂上のナポレオン像と共に引き倒され、遂に破壊されたのである（資料5参照）。

だが、パリ・コミュン崩壊後、誕生した第三共和政によって、記念柱は第一帝政期の姿での再建が決定し、1875年12月、新・ヴァンドーム広場の記念柱の落成式典が行われた（資料6参照）。

以上のように、僅か70年足らずの間に、記念柱の建立→ナポレオン像の撤去→ナポレオン像の復活→ナポレオン像の交代→記念柱の破壊→記念柱



[資料 3]



[資料 4]



[資料 5]



[資料 6]

の再建と、目まぐるしくヴァンドーム広場の記念柱は変容を遂げている。それは19世紀フランスの政治体制の大きな変動と、見事なまでに符合しているが、その背景には一体どのような「集団の社会的力」が働いているのであろうか。

それを解く鍵は、ナポレオンの記憶＝伝説と結びついた、19世紀フランスにおけるボナパルティズムの存在にある。例えば、西川長夫は『フランスの近代とボナパルティズム』の中で、「ナポレオン伝説の変容」を分析し、ナポレオン伝説の特色として、①近代社会の誕生にかかわる伝説であり、フランス大革命と帝政期の国民的な体験がナポレオンの伝説として結晶した、②無名の大衆によって語り継がれ自然発生的に形成された側面と、新聞・雑誌・書物・演劇・絵画・流行歌等、近代的なメディアを通じて多分に人為的に形成された側面を併せ持つ、③生前のナポレオン自身によって加筆修正された伝説という、極めて特殊な性格を持つ、の三点を挙げ、「農民も労働者も政治家や知識人も、それぞれの仕方においてではあるが、ヨーロッパをおおったこの巨大な幻想を共有」し、「ナポレオン伝説は政治的な大状況を動かす現実的な力となりえた」としている⁽¹²⁾。

このように、ナポレオン3世と第二帝政の誕生に象徴される、19世紀のフランス社会においては、ナポレオン(1世)の記憶自体が、ナショナル・アイデンティティの拠り所とされ、政治的・経済的要因と密接に絡み合っ、社会を動かす原動力になったと言っても過言ではない。それゆえ、ヴァンドーム広場の記念柱は、国民国家形成時の社会におけるボナパルティズムの高揚を映し出す鏡でもあり、その時々々の社会のナポレオンの記憶の意味付けの変化に応じて柱上のナポレオン像も姿を変える、と言えるのではないだろうか。

4. ヴァンドーム広場の記念柱の教材化

(1) 記念柱の建立（第一帝政期）

ルーヴル美術館主任学芸員シルヴァン・ラヴィシエールは、『世界美術館紀行 ルーヴル美術館Ⅱ ナポレオンが築いた美の都』というテレビ番組の中で、ナポレオン時代のフランス美術について次のように語っている。「ナポレオンは美術愛好家ではありません。彼にとって絵画は宣伝のためのもので、事実の記録でもニュースでもありません。人々に見て欲しい姿、人々の記憶に残って欲しいイメージを描いたものなのです。」⁽¹³⁾

その典型的な例が、世界史の教科書や資料集でもよく紹介されている、「皇帝の首席画家」ダヴィッドによって描かれた『皇帝ナポレオン1世と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠式』の絵であり、まるで戴冠式を撮影したかのようなリアリティを見る者に与える一方で、この中に描かれた登場人物は実際の姿とは異なり、政治宣伝として利用しようとするナポレオンの意思を映し出したものである。

美術史研究の鈴木杜幾子によれば、「ナポレオンが美術に期待したことは、一言でいえば『プロパガンダ』効果であった。彼の軍事的栄誉、政治的卓見を、堂々と、しかもわかりやすく描き出した絵、これがナポレオンの望むところであった。ナポレオンの治世に同時代の事件を描いた大画面の絵画が一般化したこと背景には、美術に対する為政者のこのような要請があったのである」とし⁽¹⁴⁾、ヴァンドーム広場に建設された記念柱についても、「この円柱は、1805年のアウステルリッツの戦いの時にオーストリア軍から奪った大砲1200門を鋳直して造ったブロンズ製で、手本となったのはローマのトラヤヌス帝の円柱である。トラヤヌス帝の円柱は、皇帝

のダキア戦争の勝利を記念して二世紀初頭に建設された大理石の柱で、柱身の周囲にダキア戦争のエピソードの浮き彫りが帯状に巡らされている。頂きにはかつては皇帝の像があったが、16世紀に聖ペテロ像に取り替えられた。イタリアを支配下においていたナポレオンは、この円柱の立つトラヤヌス帝の広場の発掘調査を継続させている。ヴァンドーム広場の円柱やカルーゼルの凱旋門にみられる古代ローマの代表的なモニュメントの模倣は、帝政時代のパリの都市計画の目標が『新しいローマ』の建設であったことを示すものであった」と、その政治的意図を明らかにしている⁽¹⁵⁾。

このような意図から、ナポレオンは彫刻家のアントワーヌ・ショーデに、ローマ皇帝に模した姿のナポレオン像を制作させ、柱身にはアウステルリッツの戦いの諸場面が浮き彫りにされて、1810年8月15日のナポレオン41歳の誕生日に公開された。

(2) ナポレオン像の撤去（復古王政期）

『ナポレオン伝説とパリ 記憶史への挑戦』を著した杉本淑彦は、この中で第一帝政末期のフランス社会の状況を、ヴィクトル・ユゴーの文学作品に注目しながら、「ユゴーが『レ・ミゼラブル』のなかで言うように、『国民の疲弊』と、徴兵され死んでいく息子を悼む『母親たちの反感』が、帝政末期すでにナポレオンへの帰属心を民衆のあいだから奪っていた。1810年末から始まった深刻な不況で、失業率が大幅に上昇。パリでは、労働者の40%が失業状態にあったといわれている。そして、生活必需品である塩やブドウ酒などにまで、大幅にかけられるようになった消費税。それに追い打ちをかけるように、戦況の悪化。戦勝の見込みが低下しているなかで徴兵制が強化され、これは大量の徴兵忌避者と逃亡兵を生むことになる。

1811年からの3年間で、その数は1万人を超えた」とし、ナポレオン帝政崩壊後に誕生したブルボン復古王政は、そのような民衆の心理を背景に、反ナポレオンの政治宣伝を活発に行い、「ナポレオン伝説は、黄金伝説から暗黒伝説へと180度変化していった」と分析する⁽¹⁶⁾。

ナポレオンが退位した1814年のパリで流布した風刺画でも、それは窺い知ることが出来、例えば「人類をむさぼり喰らう鬼」と題された絵に代表されるように、ナポレオンは多くの若者を死に追いやった「人喰い鬼」として描かれている（資料7参照）。また、フランス・ロマン主義の作家であるシャトブリアンが、1814年に著した『ブオナポルテとブルボン家論』では、ナポレオンはコルシカ島出身の「よそ者」であり、「人類史上最悪の犯罪者」と糾弾されている⁽¹⁷⁾。

そして、当時13歳の少年であったヴィクトル・ユゴーは、ブルボン復古王政を称えて、1815年12月に「国王ばんざい！フランスばんざい！」と題する、次の詩を作った。「コルシカは倒れ伏し、ヨーロッパはルイの即位を宣言し、不実な殺人ワシが、ユリの花の前に墜落する。国王ばんざい、国王のおかげでわたしたちは幸せになれる。国王はわたしたちに豊かさをもたらす。オーイみんな、心をこめて何度もくりかえそうよ、国王ばんざい、フランスばんざい。」⁽¹⁸⁾

このような社会状況の中で、ヴァンドーム広場の記念柱の頂きにあったナポレオン像は1814年に撤去され、記念柱は「ナポレオンの軍事栄光」から「フランスの軍事栄光」を記念するものへと読み替えられ、頂きにはナポレオン像の代わりにブルボン王朝のユリの紋章入りの白旗を設置し、国威発揚のモニュメントとされた。そして撤去されたナポレオン像は、ブルボン王朝のアンリ4世の騎馬像に改鋳されたのである。この出来事を当時17歳のユゴーは、次の「アンリ4世像の再建」（1819年）という詩で発表

している。「若者たちよ、この柵のまわりで輪になって踊れ、楽しいステップをともに踏み、幸せな歌声をともに響かせろ。善良さが顔にあふれんばかりのアンリが、君たちの喜びように心動かされ、祝福をくださるだろうから。うぬぼれのモニュメントの上で、そびえ立っていた暴君は、あまたの年月こそかかりはしたが、抑圧されていた臣民の手でとどめを刺され、その近くにあって、ああ、なんて美しいのだろうこの青銅は！」⁽¹⁹⁾

(3) ナポレオン像の復活（七月王政期）

1821年5月5日、ナポレオンは囚われの身のままセント・ヘレナ島で死亡した。しかし、ナポレオンの記憶は、彼の死後、劇的な変容を遂げていく。その契機となったのが、1823年末にパリで出版された『セント・ヘレナ回想録』である。これはセント・ヘレナ島でナポレオンに侍従として仕えたラス・カーズが著したもので、ナポレオンの「口述記録」とされている。

フランスの歴史家ジャン・チュラールは、「遺骸の帰還 ナポレオン伝説とアンヴァリッド」の中で、この回想録が果たした影響力の大きさを、「その本によって暴君のイメージが修正された。『十字架の上で死ななかったならば、キリストは神とはなっていないであろう』と、ナポレオンは言っただけらしい。迫害されて死んだことで、ナポレオンは浄化されたのである。人びとはナポレオンを憐れみ、同情し、彼のために涙を流した」とし、「セント＝ヘレナに囚われたおかげでナポレオンは、徴兵の乱用で離反した民衆から、同情と賞讃を取り戻した」と分析する⁽²⁰⁾。

また、「迫害に苦悩するナポレオン」像と並んで、「栄光のナポレオン」像も、この本によって決定的なものとなった。それは「フランスが繁栄し



[資料 7]



[資料 9]



[資料 8]

ヨーロッパを支配していた時代」を読者に喚起させ、ナポレオンを「フランス革命の防人」として位置付け、「フランス革命にナポレオンを一体化させる」ことに見事に成功している⁽²¹⁾。

それはまさに「ナポレオン自身が先頭になって創り出そうとした伝説」であり、ラス・カーズの巧みな脚色によって増幅され、多くのフランス人に受容される結果となった。例えばフランス・ロマン主義の作家ジェラルド・ド・ネルヴァルが、1826年に発表した「流刑者の死」という詩の中でナポレオンは、「彼は戦勝時と同様に平和時にも偉大だった。ああ、フランス人よ、あの栄光の円柱を凝視せよ、その誇らしげな青銅にはおまえたちの戦闘が刻まれている。立法者に栄光あれ、彼は犯罪をうち倒し、無実に対しては厳格な復讐者を示す。彼に鼓舞され力を取り戻した裁きの神テミスが、英雄に聖なる輝きをあたえる」と賞讃され⁽²²⁾、ヴァンドーム広場の記念柱によって（ナポレオン像は不在のまま）「英雄」ナポレオンが想起されている。

このような時代の空気の変化の中で、記念柱を「うぬぼれのモニュメント」と呼んだユゴーもまた、ナポレオンに対する見方を大きく変えている。彼が1827年に発表した「ヴァンドーム広場の円柱に」と題する詩では、「ああ、復讐のモニュメントよ！忘れがたい勝利の思い出よ！不動の柱脚の上で螺旋に渦巻く青銅よ、天空に、おまえの栄光とおまえの死滅が記されているようだ。巨大な手がなした事跡のなかで、ただ一つ倒れずにいるもの、—それは、勝利をとどめる、巨人の建造物のこの名残だけ！大帝国と大軍隊の名残であっても、円柱から、盛名がはっきりと聞こえてくる。わたしは、おまえを愛する。異邦人も、おまえを見上げて畏れる。わたしは、勝利で刻まれたおまえの英雄たちを、栄光につつまれ、おまえのまわりでひしめく、この亡霊たちを、すべて愛する」と謳った⁽²³⁾。

そして、ナポレオン時代への郷愁の高まりと共に、復古王政に対する糾弾の聲が強まる中、1830年7月、パリの民衆が蜂起して七月革命が起こり、自由主義者のオルレアン家のルイ・フィリップが新しい国王として迎えられた。

七月革命直後の1830年10月には、ユゴーはナポレオンの遺骸の帰還を訴える「ヴァンドーム広場の記念柱によせる第二のオード」を発表し、「眠れ、私たちはあなたの亡骸を求めに行く。その日はおそらくやって来るだろう。じっさい私たちはあなたを支配者としてあおがなかったが神としてあおいでおり、あなたの不幸な運命に私たちの目は濡れたのだ。王旗の下でも三色旗の下でも私たちはあなたを台座から引き降ろすあの恥ずべき綱を引きはしない！ああそうだと、あなたの葬いは立派にしてやろう。私たちがまたおそらく私たちの戦さをもち、それによってあなたの尊い柩に蔭をつくろう。私たちはその葬いの場にヨーロッパやアフリカやアジアを招こう。そして私たちはあなたのために若々しい自由をうたう若々しいポエジーをあなたのところに連れていこう！」と謳って、当時のフランス社会におけるボナパルティズムの高揚を、ユゴー自身が見事に体現して見せている⁽²⁴⁾。

新国王となったルイ・フィリップは、このような民衆の間のナポレオン人気におもねる形で、1831年4月に記念柱のナポレオン像の再建の勅令を出し、1833年7月28日、七月革命3周年を記念して、その除幕式典を行った。ただし、それは先述のように、かつての皇帝の姿ではなく、「小伍長」の姿をしたナポレオン像であった。

その理由として、鈴木杜幾子は、「かつてのショーデの作品のような『皇帝』ナポレオン像は王政をまっこうから否定する意味合いをもってしまうために、政府が主催した製作者決定のコンペティションでは軍服姿の像と

いう条件がつけられた。これには、柱身の浮き彫りが『大陸軍』の兵士たちをあらわしているのに調和するという大義名分もあった。だがそれにも増して、軍人ナポレオンの像はフランスの栄光の時代を人々に思い起こさせる力を持ち、特に『小伍長』は王政復古期の反体制精神の象徴として、オルレアン体制にとっては好ましいイメージであったのである。(中略) ルイ・フィリップ王と側近の意図は、王政復古期の反体制の象徴であった『小伍長』を公的美術に取り入れることによって、共和派と結ぶボナパルティスト勢力を懐柔しようとするものであった」と説明する⁽²⁵⁾。

さらに、3年後の1836年7月29日には、エトワール広場の凱旋門が完成し、七月王政はナポレオンを顕彰することを政策として、熱心に推し進めていったのである。

(4) ナポレオン像の交代 (第二帝政期)

七月王政が行ったナポレオンの顕彰行為の中で、最大規模のものが1840年に実現させた、ナポレオンの遺骸のパリ帰還である。その10年前にユゴーが「ヴァンドーム広場の記念柱によせる第二のオード」で熱望したナポレオンの帰還が、遂に現実のものとなった。

ジャン・チュラールによれば、「遺骸帰還の政治的意図」は、経済不況や深刻化する失業問題に対する民衆の不満の高まりを、示威行事によってそらすと同時に、「七月王政(オルレアン家)は、依然として本家(ブルボン家)に忠実な王党派と、共和派との双方から、正統性の面で異議をさしはさまれていたので、遺骸の帰還は、七月王政が正統性を得るうえでの口実を手にする好機」であり、それによって「フランス革命との親子関係」を主張しようとしたと見る⁽²⁶⁾。

例えば、1840年5月12日に、内相レミュザは議会において、「ナポレオンは皇帝でもあり国王でもありました。わが国の正統な君主でありました。しかしナポレオンに対しては、国王の普通の墓所をあてがうというわけにはまいりません。祖国の兵士が安らぎをうる場所、祖国を守るべく将来召集されるであろう人びとが訪れてつねに鼓舞される場所。そういう場所でナポレオンが国を統治し軍隊を指揮しつづけている、ということが必要なのであります。統治と指揮のための剣が墓上に置かれるでありましよう。今後はフランスが、フランスのみが、永遠に遺るナポレオンのすべてのものを占有することになるでありましよう。ナポレオンの墓所は、彼の記憶とおなじように、彼の国のみにも帰属することになるでありましよう。と申しますのも、1830年に誕生した王政は、フランスが誇るすべての主権者の唯一正統な継承者だからであります。民衆の英雄の像と墓を、なんの危惧もなしに建立し崇拜しうるものがあるとすれば、それはおそらく、あらゆる勢力の統合役を、フランス革命の願望の調停役を、はじめてはたしたこの1830年王政なのであります」と演説し⁽²⁷⁾、そこではフランス革命とナポレオンの記憶の一体化が生じた後に、今度はナポレオンを顕彰することで、七月王政をフランス革命の正統な継承者に位置付けようとする意図が読み取れる。

このような政治的意図の下、1840年12月15日、七月王政はセント・ヘレナ島より持ち帰ったナポレオンの遺骸を巨大な霊柩車に乗せ、ナポレオンの遺骸のパリ市内葬送行進を挙行了た。

ところが、その思惑は思わぬ事態を招く結果となった。パリ市内葬送行進当日の沿道の声伝える「シャリヴァリ」紙では、「どこかしこでも皆がいっせいに、『皇帝ばんざい！』と叫んだ。あちこちで、『裏切り者を倒せ！』とか、『ギゾーを倒せ！』とも叫ばれた。『国王ばんざい！』の

声は、沿道で聞かれなかった」と記され⁽²⁸⁾、また、1840年末の風刺画「ナポレオン像と対をなす銅像計画」(資料8参照)では、ルイ・フィリップが、彼自身が再建したヴァンドーム広場の記念柱の頂きに立つナポレオン像と正反対に描かれ(軍服→平服, 剣→雨傘, 砲弾→人気取りの勲章の山), その弱腰の姿勢が嘲笑されるなど、遺骸の帰還でナポレオン熱は一気に高まると同時に、それは七月王政を批判する方向へと転化したのである。

杉本淑彦は、「民衆がナポレオンを崇拜するのは、ナポレオンの実像とは無関係に、『革命の子』伝説に代表される自由と平等の擁護者、つまり社会改革の実現者という姿をナポレオンの中に見たからだった」と評しているが⁽²⁹⁾、創り出されたナポレオンのイメージが神話化され、再度黄金伝説として、人々の記憶の中に鮮やかに蘇り、皮肉にもナポレオンを政治的に利用しようとした七月王政は、反対にナポレオンが想起する新たな記憶によって政治的土台を揺るがされることになった、と言えよう。

まさに、このような状況の中で、後のナポレオン3世となるルイ・ナポレオンが登場した。ルイ・ナポレオンは、1839-40年に著した『ナポレオンの観念』の中で、「道義にかない、かつ進歩的で文明的な思想は、政情不安定な社会のなかからこそ生まれてくる。つまり、ナポレオンの観念は、兜をかぶり火炎につつまれながらミネルヴァがジュピターの頭から生まれ出たように、フランス革命のなかから生まれてきたのだ」とし、「ナポレオンの観念は、貧しき家にこそ目を向けるものである。人権について無益な宣言をただ振りかざすのではなく、貧しき者の渇きと飢えを癒すために、必要な方策を携えて彼らの家へ赴く。これがナポレオンの観念なのだ」と訴え、「帝政期のさまざまな戦争は、ナイル河の氾濫のようなものだった。大河の水がエジプトの田畑を覆いつくしているとき、人が思い描くのは惨禍ばかりだろう。しかし、水が退くや、たちまちその跡に、豊沃と豊穡が

もたらされるのだ」とナポレオン戦争の惨禍を隠蔽し⁽³⁰⁾、「自由と平等の擁護者」「社会改革の実現者」であるナポレオン1世と自らを同一視させることを目指している。

そして、1848年の二月革命後に誕生した第二共和政下で、普通選挙によって実施された大統領選にルイ・ナポレオンは出馬し、ヴァンドーム広場の記念柱上のナポレオン像を投票箱に見立てた選挙用ポスター（資料9参照）を作成するなど、民衆のナポレオンの記憶に訴えることで世論を味方につけ、選挙に圧勝して大統領となったが、その3年後の1851年12月2日（ナポレオン1世の戴冠記念日）にはクーデタを決行し、翌1852年の国民投票で支持を得て、同年12月2日ナポレオン3世と称して第二帝政を開始した。それはまさにボナパルティズムが最高潮に達し、ナポレオンの記憶が現実の世界を動かしたことの証しである。

かつてナポレオン1世を顕彰した多数の作品を著し、ルイ・ナポレオンの大統領就任に貢献したユゴーは、クーデタに反対してフランス国外での亡命生活を余儀なくされたが、1852年、第二帝政の開始に対し、怒りを込めて『懲罰詩集』を出版した。この中でユゴーは、自らのボナパルティスト詩人としての半生に対する悔恨と、民衆のボナパルティズムの高揚に対する危惧から、「贖罪」と題する次の詩を発表している。「皇帝は死んで、破壊された帝国の上に倒れた。ナポレオンは、柳の木の下で永遠の眠りについた。すると、全世界の諸国民は、独裁者ナポレオンを忘れて、英雄ナポレオンに夢中になった。詩人たちは、死刑を執行した諸国の王たちの額に烙印を押し、瞑想にふけりながら、この敗れた栄光の人を慰めた。そして、ぽつんとさびしく立っているヴァンドーム広場の記念柱に、人々は皇帝の像を戻した。目を上げると、パリの町に、静かにあたりを見下ろしながら、皇帝の像が立っているのが見えた。ただひとり、昼は青空を、夜は

星空を背にして。諸国の偉人廟よ、人々は彼の名をおまえたちの柱に刻んだ！人々がいま見ているのは、あの時代の明るい面ばかり。人々がいま思い出すのは、栄光に輝く日ばかり。あの不思議な男は歴史を陶醉させたと言えるのだ。冷静な目をもつ公正さも、あの皇帝の栄光のもとに消えうせた。」⁽³¹⁾

ユゴー自身、ナポレオンの記憶に翻弄された一人と言えるが、当時のフランス国内の熱狂的なボナパルティズムに対して、ユゴーは国外から醒めた視線で警鐘を鳴らしたにもかかわらず、第二帝政が既成事実化される中、1863年、ヴァンドーム広場の記念柱上のナポレオン像は、初代のローマ皇帝姿のナポレオン像を再現したものと交代されたのである。

(5) 記念柱の破壊 (パリ・コミューン期)

ナポレオン3世は、ナポレオン1世の記憶を政治的に利用し、自らをナポレオン1世と同一視させ、フランス革命とナポレオン1世の正統な後継者としての立場を強調したが、フランス＝プロイセン戦争に敗北して捕虜となるという失墜によって、第二帝政が崩壊すると共に、ヴァンドーム広場の記念柱もまた、パリ・コミューンの手によって同様の運命を辿った。

1871年、パリ・コミューンは次のような布告を出している。「パリ・コミューンは、ヴァンドーム広場の帝国円柱が、野蛮の記念碑であり、暴力と虚栄との象徴であり、軍国主義の肯定であり、国際法の否定であり、敗者に対する勝者の永遠の凌辱であり、フランス共和国の三大原則の一なる友愛に対する永久の侵害であることに鑑み、左の如く布告す。一箇条ヴァンドーム広場の円柱は、これを破壊すべし。1871年4月12日、パリ・コミューン」⁽³²⁾

もはや、記念柱が想起させるのは、「栄光のナポレオン」「フランス革命の防人」ではなく、正反対のイメージであり、かつての暗黒伝説の記憶が再度蘇ったと言えよう。19世紀のフランスの歴史学者ミシュレは、七月王政下でナポレオンを讃えた経歴を持つが、彼が1872-75年に著した『19世紀史』の中では、「イギリスは格別まぬけにも、ナポレオンをセント・ヘレナに住まわせてしまった。そのおかげであの狡猾な人間は、香具師の演芸台を、（プロメテウスが鎖で縛り付けられた）カフカス山地になるよう、とびきり高くしつらえることができたのだ。そしてそこで、世間の隣れみをまんまと利用し、それから嘘を繰り返すことで、帝政時代の災難を、一切合切もう一度血なまぐさく再演しようとしてたのだ」と⁽³³⁾、ナポレオンを辛辣に批判して見せた。

それは、記憶の現在性、すなわち記憶が「現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為」であることを見事に物語っており、記憶の構築性を認識すると同時に、社会集団のアイデンティティもまた、常に「鋳直される」ものであること示唆している。

(6) 記念柱の再建（第三共和政期）

しかし、ナポレオンの記憶は封印されることなく、再度復活して20世紀の歴史、そして現在まで影響を及ぼし続けている。それを象徴するかのようには、1875年にヴァンドーム広場の記念柱は、建立時の姿で再建された。では何ゆえにナポレオン像は復活し、ナポレオンが想起する記憶が必要とされたのであろうか。

その理由は、フランス＝プロイセン戦争の敗北によって、アルザス・ローヌ地方をドイツに奪われるという、屈辱感に対する「対独復讐熱の喚

起」であり⁽³⁴⁾、かつてイエナの戦いでプロイセンをナポレオンが撃ち破った記憶が、必要とされたのである。

例えば、対独復讐論者の最右翼として活動した、ロレーヌ出身の政治家・作家のモーリス・バレスは、1898年に当時の若者の間でベストセラーとなった小説『根こぎにされた人びと』を著わし、この中で主人公のロレーヌ地方出身の若者に、ナポレオンの命日にその遺骸が眠るアンヴァリッド館を訪ねさせ、次のように語らせている。「僕たちの世代は、まだ雑然とした集団にすぎないけれども、そのなかに、指導者が潜み、リーダーが、明日の指揮官がいるんだ。そんな選良として生まれついた運命なのだ気づかせてくれる、何かしるしのようなものがあるのだろう。でも、しるしを探すなんて、もうやめにしよう。僕たちこそがその何かを内に持っている、と信じようではないか。僕たちが指揮官なんだよ、きっと！ナポレオンの墓に、エネルギーの師の墓に、一人前の男であることを誓おう！」⁽³⁵⁾

先に七月王政下の内相レミュザが「祖国の兵士が安らぎをうる場所、祖国を守るべく将来召集されるであろう人びとが訪れてつねに鼓舞される場所。そういう場所でナポレオンが国を統治し軍隊を指揮しつづけている」と演説したように、まさにその場所でナポレオンは故郷をドイツによって奪われた人びとに復讐のエネルギーを与える役割を果たし、ヴァンドーム広場の記念柱上のナポレオン像もまた、「フランスの守護神」として再々度の復活を果たして、多くの若者にプロイセンに対する勝利の記憶を想起させることに貢献した。しかし、それは同時に、戦争がもたらす「野蛮」や「暴力」の記憶を忘却へと押しやり、フランスは145万人に上る戦死者を生み出す第一次世界大戦に向って突き進んでいった、と言えるのではないだろうか。

5. 単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」の開発

以上の教材を用いた授業構想が、単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」である。本単元で取り上げる内容は、高等学校学習指導要領の世界史Bの「内容」の「(4) 諸地域世界の結合と変容」の「ウ ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成」に位置付け、19世紀のフランス社会の変動を、ヴァンドーム広場の記念柱の変容に注目しながら理解し、国民国家の形成に果たした歴史表象の役割りを考察すると共に、近現代世界に対する多角的で柔軟な見方を養うことを単元の目標とする。

また、本単元の配当時間は5時間とし、以下のような構成とする。

第1次：＜導入＞ナポレオンとフランス近代美術（1時間）

第2次：ヴァンドーム広場の記念柱とフランス社会の変動（3時間）

第3次：＜発展学習＞「記憶のかたち」と歴史表象（1時間）

次に、各次の学習指導計画を示す。

(1) 第1次：ナポレオンとフランス近代美術

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>ナポレオンについて知っていることを挙げ、ナポレオンの生涯について概観する。</p> <p>ルーヴル美術館にある、ダヴィッド作『皇帝ナポレオン1世と皇妃ジョ</p>	<p>写真パネル『皇帝ナポレオン1世と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠式』の掲</p>

<p>ゼフィーヌの戴冠式』の絵を見て、そこに描かれた人物について知る。</p> <p>同じ絵の下絵を見て、完成した絵との違いを探して発表し、その理由について話し合う。</p>	<p>示</p> <p>プリント「ダヴィッドが描いた戴冠式の下絵」配布</p> <p>下絵の中で描かれた、ナポレオン自身が自分の頭に戴冠する様子や、それに対して背後のローマ教皇が何ら祝福を与えていない様子等に注目させる。</p> <p>ダヴィッドによって描かれた絵は、ナポレオンの戴冠という歴史的事件の「ありのままの記録」ではなく、「帝権の視覚化」を効果的に演出することによって、それを見る人間に皇帝ナポレオンの権威を印象付ける「つくられたイメージ」であったことに留意する。</p>
<p>ルーヴル美術館のVTRを見て、ナポレオンが美術を政治的に利用しようとし、政治的意図を持った絵画や彫刻・記念碑が、19世紀のフランスで盛んに製作されるようになったことを知る。</p>	<p>VTR『世界美術館紀行 ルーヴル美術館Ⅱ ナポレオンが築いた美の都』（NHK製作、2004年放映）の上映</p> <p>VTRに登場するルーヴル美術館主任学芸員シルヴァン・ラヴィシエ</p>

	<p>ールの解説に注意し、ナポレオンの時代の「政治と美術」の関係を読み取れるよう配慮する。</p>
--	---

(2) 第2次：ヴァンドーム広場の記念柱とフランス社会の変動

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>パリの絵地図を見ながら、ナポレオンが古代ローマの美術様式を模倣した建造物やモニュメントを造って、パリを帝都にふさわしい「新しいローマ」に改造しようとしたことを知り、ヴァンドーム広場の記念柱に注目する。</p> <p>記念柱上のナポレオン像の姿を見てそれが何を表し、どのような意図を持って製作されたものであったかを考える。</p> <p>ナポレオンの「百日天下」後、誕生したブルボン復古王政下での記念柱の姿を知る。</p>	<p>プリント「パリの絵地図」の配布</p> <p>写真パネル「ヴァンドーム広場の記念柱」の提示</p> <p>パネル「記念柱上の初代ナポレオン像の模写」の提示</p>

ヴィクトル・ユゴーの作った詩を読み、また当時の風刺画を見て、ナポレオンが「殺人ワシ」「人喰い鬼」として人々に想起されていることに気付く。

ナポレオンの死後出版された『セント・ヘレナ回想録』を読み、ナポレオンが再評価されるようになったことを知る。

ジェラルド・ド・ネルヴァルの詩を読み、ナポレオン像が撤去されたヴァンドーム広場の記念柱から、「英雄」ナポレオンが想起されていることに気付く。

ユゴーの作った詩を読み、彼のナポレオンに対する評価が、どのように変化したかを知る。

プリント「ユゴー作『国王ばんざい！フランスばんざい！』・『アンリ4世像の再建』」の配布

ユゴーが詩の中でナポレオンに対し「うぬぼれのモニュメントの上で、そびえ立っていた暴君」と評していることに注目させる。

プリント「『セント・ヘレナ回想録』」の配布

プリント「ネルヴァル作『流刑者の死』」の配布

プリント「ユゴー作『ヴァンドーム広場の円柱に』」の配布

ユゴーが詩の中でナポレオンとその軍隊を、「巨人」「英雄たち」と賞賛するようになったことに注目させる。

<p>七月革命によって誕生した七月王政下で、ナポレオン崇拜熱（ボナパルティズム）が高揚したことを、ユゴアの詩をもとに理解する。</p>	<p>プリント「ユゴア作 『ヴァンドーム広場の記念柱によせる第二のオーダー』」の配布</p>
<p>七月王政がヴァンドーム広場の記念柱のナポレオン像を復活させたことを知る。</p>	
<p>新たに製作された記念柱上のナポレオン像を見て、何ゆえ皇帝の姿ではなく「小伍長」姿に変身したのかを話し合い、七月王政の政治的意図について考える。</p>	<p>写真パネル「記念柱上の二代目ナポレオン像」の提示 七月王政が民衆の間のナポレオン人気を政治的に利用しようとした一方で、王政批判に繋がる要素を意図的に排除したことに注意する。</p>
<p>ナポレオンの顕彰が政策として採用され、エトワール広場の凱旋門の建設や、ナポレオンの遺骸のパリへの帰還が計画されたことを知る。</p>	<p>写真パネル「エトワール広場の凱旋門」の提示</p>
<p>ナポレオンの遺骸の帰還を議会で訴えた内相レミュザの演説を読み、その政治的意図に気付く。</p>	<p>プリント「レミュザの演説」の配布 七月王政をフランス革命の正統な継承者に位置付けようとする意図が読み取れるよう配慮する。</p>

<p>ナポレオンの遺骸の帰還を報じた新聞を読み、それが民衆にどのように受け止められたかを読み取る。</p>	<p>プリント「ナポレオンの遺骸のパリ市内葬送行進当日の沿道の声」の配布</p>
<p>ルイ・フィリップ王に対する風刺画を見て、ボナパルティズムが七月王政を批判する方向に転化したことに気付く。</p>	<p>パネル「風刺画『ナポレオン像と対をなす銅像計画』」の提示 七月王政の政治的意図を超えて、ナポレオンの記憶は社会に不満を持つ民衆を刺激してボナパルティズムの激昂を招き、やがてそれが七月王政を崩壊させる原動力となったことに留意する。</p>
<p>ルイ・ナポレオンが著した『ナポレオンの観念』を読み、ナポレオン1世とその時代を、どのように評しているかを知り、その政治的意図について考える。</p>	<p>プリント「ルイ・ナポレン著『ナポレオンの観念』」の配布 ルイ・ナポレオンが、ナポレオン戦争の惨禍を隠蔽し、ナポレオン1世を「自由と平等の擁護者」「社会改革の実現者」と位置付けていることに注目させる。</p>
<p>二月革命後、第二共和政下で実施された大統領選挙に出馬したルイ・ナポレオンの選挙用ポスターを見て、ナポレオン1世と自らを同一視させようとする意図に気付く。</p>	<p>パネル「ルイ・ナポレオンの選挙ポスター」の提示</p>

<p>クーデタによって即位したナポレオン3世が開始した第二帝政下で、ヴァンドーム広場の記念柱がどのように変容したかを知る。</p>	<p>再びローマ皇帝姿に戻ったナポレオン像の意味が読み取れるよう配慮する。</p>
<p>第二帝政に反対するユゴーが亡命先で著した詩を読んで、ナポレオンの記憶に高揚する民衆に対して警鐘を鳴らしたことを知り、歴史的記憶の政治的利用に対して意見を述べる。</p>	<p>プリント「ユゴー作『贖罪』」の配布 ユゴーのナポレオンに対する評価が再び「英雄」から「独裁者」へと変化したことに注目させ、社会状況の変化を反映して、歴史的記憶もまた書き換えられるものであることが分かるよう配慮する。</p>
<p>フランス＝プロイセン戦争の敗北と第二帝政の崩壊によって、ヴァンドーム広場の記念柱が、どのような運命を辿ったかを知る。</p>	<p>写真パネル「ヴァンドーム広場の記念柱の倒壊」の提示</p>
<p>パリ・コミューンの布告を読み、記念柱が「野蛮」「暴力と虚栄」「軍国主義」を想起させたことに気付く。</p>	<p>プリント「パリ・コミューン布告」の配布</p>
<p>歴史学者ミシュレが著した『19世紀史』を読み、第二帝政に対する批判に連動して、第一帝政もまた否定さ</p>	<p>プリント「ミシュレ著『19世紀史』」の配布</p>

<p>れたことを理解する。</p> <p>第三共和政下で、ヴァンドーム広場の記念碑が再建された、政治的意図について考える。</p> <p>バレスが著した『根こぎにされた人びと』を読み、ナポレオンの再評価が、どのような社会的背景の下に行われたかを読み取る。</p>	<p>写真パネル「再建されたヴァンドーム広場の記念柱」の提示</p> <p>プリント「バレス著『根こぎにされた人びと』」の配布</p> <p>ナポレオンが新たに対独復讐のシンボルとしての役割を担ったことに留意する。</p>
---	---

(3) 第3次：「記憶のかたち」と歴史表象

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>新聞等で歴史的出来事や人物を記念したモニュメントをめぐる記事を探し、発表する。</p> <p>(例) ヤルタ会談を記念したスターリン像の建立計画に対して、ロシア各地で繰り広げられている議論について発表する。</p> <p>発表資料をもとに、スターリン像の</p>	<p>発表資料（新聞の記事等）の配布</p> <p>スターリン像によって、スターリン</p>

建立に反対の立場の意見について整理しまとめ、それがスターリンに対するどのような記憶を想起させるのかを考える。

今度はスターリン像の建立に賛成の意見について整理しまとめ、何ゆえスターリンを顕彰しようとするのかその理由について考える。

スターリン像の歴史の変遷についてかつてそれがどのような時代に建立され、また廃棄されたのかを知り、モニュメントが時代を映し出す示標となることに気付く。

なぜ今スターリン像が「必要」とされるのか、その社会的背景について話し合う。

なぜモニュメントは作られたり倒されたりするのかを考え、歴史表象は固定的なものではなく、常に「現在」から再構築されて、それを巡る政治的な闘争が生じることを理解する。

が1930年代に行った大粛清を想起させ、「独裁者」スターリンに対する記憶が未だ払拭されていない点に留意する。

2005年が対ナチス・ドイツ戦勝60周年の年であり、ソ連を勝利に導いた「英雄」スターリンを称えようとする動きがあることに注目させる。

スターリンが絶大な権力を掌握した1930年代にスターリン像は盛んに建立され、その死後スターリン批判が行われると破壊が始まり、ソ連の崩壊と共に、ほとんどのスターリン像が姿を消したことに留意する。

激変するロシア社会において、強力な指導者を待望し、社会主義体制を再評価しようとする声が高まっていることに注意する。

ヴァンドーム広場の記念柱上のナポレオン像を変遷と対比できるよう留意する。

おわりに－「モノが語る」と「モノを語る」－

先述の『ナポレオン伝説の形成 フランス19世紀美術のもう一つの顔』を著した鈴木杜幾子は、「美術というよりはより広い意味での視覚資料が、あまりに安易に歴史資料として用いられていることに対して美術史家として感じる違和感」が執筆の動機となったと述べている⁽³⁶⁾。

歴史教育の場では、よく「モノが語る歴史」という言葉を目にするが、絵画資料も含めて形ある歴史資料を授業で教材として用い、歴史理解の手助けとすることが盛んに行われている一方で、原田智仁も指摘するように、あくまでそれは「一定のリアリティをもたらすための手段」としてであって、教科書的なストーリーを補強することを目的としており、それが表象する内容を十分に吟味せず、ビジュアルな（あるいは手に取れる）教材として珍重する傾向があるように思う。

かつて私自身も、高等学校の教壇に立って世界史を教えながら、少しでも生徒に「受ける」ように、国内外の博物館で教材に使えるようなミュージアム・グッズを捜し求めた経験があり、決して他人事ではないが、教師は安易に「モノ教材」に寄りかかることを慎むべきであろう。特に、記念碑や歴史画といった、過去を記念する「モノ」を扱う際には、それらが想起させる歴史的記憶が、いつ誰によって、どのような目的から構築されたものなのか、ということに対して、十分な注意を払う必要があり、「モノが語る」のではなく、人間が「モノを語る」ということの意味を吟味しなければならないのではないだろうか。

そして、記念碑等の「記憶のかたち」に注目し、それが「どのように語られてきたのか」、また「どのように移り変わってきたのか」という視点から教材化することによって、社会史を学習しながら同時に、歴史リテラ

シーを養うことが可能と考えるが、これについては実際に開発した単元を
実践して検証する作業が課題として残されている。

現在、教育現場からも、生徒の「何のために世界史を学ぶのか（世界史
を学んで何の役に立つのか）」という問いに答えようと、歴史リテラシー
に注目が集まるなど⁽³⁷⁾、今後一層「歴史を読み解く力」や「歴史とかわ
る力」の育成が、歴史教育の課題として重要度を増すと思う。更なる事例
研究を重ね、「記憶のかたち」の教材としての新たな可能性を探求する所
存である。

註

- (1) センター試験問題「世界史B」2002年実施，52頁。
- (2) センター試験問題「世界史A」2004年実施，4－6頁，同「世界史B」2004
年実施，32－34頁。
- (3) センター試験問題「世界史A」2005年実施，4，9頁，同「世界史B」2005
年実施，32，37頁。
- (4) 原田智仁「世界史教育の改善 歴史リテラシーの可能性(7) 銅像・記念碑の
読み解き」文部科学省教育課程科編『月刊 中等教育資料』2004年4月号，
42－43頁。
- (5) 新木武志「歴史教育における表象分析の意義と課題－トラファルガー広場の
モニュメント空間分析を中心に－」『史潮』新46号，1999年，58－71頁。
- (6) 木下直之『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶』晶文社，2002
年，70－74頁。
- (7) 小関隆「コモレイションの文化史のために」阿部安成他編『記憶のかたち
コモレイションの文化史』柏書房，1999年，7－8頁。
- (8) 安達一紀『人が歴史とかわる力 歴史教育を再考する』教育資料出版会，

2000年, 97頁。

- (9) モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』行路社, 1989年, 45 - 48頁。
- (10) パトリック・H・ハットン「現代史学における記憶の位置づけ」『現代思想』
1995年1月号, 青土社, 149 - 150頁。
- (11) 木下直之, 前掲書, 68 - 70頁。
- (12) 西川長夫「ナポレオン伝説の変容」同著『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店, 1984年, 270頁。
- (13) NHK『世界美術館紀行 ルーヴル美術館Ⅱ ナポレオンが築いた美の都』
2004年放映。
- (14) 鈴木杜幾子『ナポレオン伝説の形成 フランス19世紀美術のもう一つの顔』
筑摩書房, 1994年, 9頁。
- (15) 鈴木杜幾子, 前掲書, 162 - 163頁。
- (16) 杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ 記憶史への挑戦』山川出版, 2002年,
73 - 74頁。
- (17) 杉本淑彦, 前掲書, 54 - 56頁。
- (18) 杉本淑彦, 前掲書, 92 - 93頁。
- (19) 杉本淑彦, 前掲書, 93 - 94頁。
- (20) ジャン・チュラール「遺骸の帰還 ナポレオン伝説とアンヴァリッド」ピエール・ノラ編『記憶の場 フランス国民意識の文化=社会史』岩波書店, 2003
年, 112頁。
- (21) ジャン・チュラール, 前掲書, 112 - 115頁。
- (22) 杉本淑彦, 前掲書, 98頁。
- (23) 杉本淑彦, 前掲書, 96 - 97頁。
- (24) 西川長夫, 前掲書, 374 - 375頁。
- (25) 鈴木杜幾子, 前掲書, 164 - 166頁。

- (26)ジャン・チュラール, 前掲書, 117 - 118頁。
- (27)杉本淑彦, 前掲書, 124 - 125頁。
- (28)杉本淑彦, 前掲書, 155頁。
- (29)杉本淑彦, 前掲書, 161頁。
- (30)杉本淑彦, 前掲書, 163 - 164頁。
- (31)ヴィクトル・ユゴー『ヴィクトル・ユゴー文学館 第一巻 詩集』潮出版社,
2000年, 96 - 97頁。
- (32)アメデ・デュノア編「パリ・コムニオン資料集」木下半治編・訳「パリ・コ
ムニオン」春陽堂, 1931年, 209頁。
- (33)杉本淑彦, 前掲書, 182 - 184頁。
- (34)杉本淑彦, 前掲書, 185頁。
- (35)ジャン・チュラール, 前掲書, 135頁。
- (36)鈴木杜幾子, 前掲書, 240 - 241頁。
- (37)例えば, 愛知県教育センター発行『高等学校地理歴史科・公民科 授業の手
引き』2004年, 12頁, 等が挙げられる。

資料出典

- [資料1] 著者撮影 (2002年4月30日)
- [資料2] 同上
- [資料3] 杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ 記憶史への挑戦』山川出版, 2002
年。
- [資料4] 同上
- [資料5] 同上
- [資料6] 『CD-ROM版写真図録 19世紀ヨーロッパの残映 (1) パリとその
周辺』丸善

[資料7] 杉本淑彦, 前掲書。

[資料8] 同上

[資料9] 同上

謝 辞

本研究にあたっては、宮田研究奨励金を交付して頂いた朝日大学理事会並びに理事長に対して、また、教育現場から御助言頂いた愛知県世界史教育研究会に対して、感謝の意を表したい。